

## 4 健康・安全の窓口から見た幼児らの生活 ～「うがい」・「キズバン」を視点に～

座主 真知子

### ・「うがい」を視点にして

1月17日（木）「がらがらうがいをしてみよう」

保健指導後、「がらがらうがいをしてみよう！」と言う声かけに全員コップを準備し、洗面所に順番をつく。ほとんどの幼児が喜んで実施している。「もうばい菌いなくなった？」と言い口を開いて見てもらおうとする幼児や「上手にできた？」と確認する幼児などがある。

この場面ではじめてがらがらうがいができないことに気がつく幼児が5名、最初からできないことを知り、しようとしないうがいが2名いた。

\*できないとは口に水を含んだまま上を向くことのできない幼児、口に水を含み「がらがら」と言えない幼児、水を含んでがらがらは言っても口のまわりから水がこぼれてきてしまう幼児などである

R児にとってこの日が「がらがらうがい」の初めての体験だったよう。にこにこしながら順番を待つ。

R児は口に水を含み上を向いたが、その瞬間に口から水がこぼれ、残りの水を吐き出してしまふ。服は襟元から前にかけて濡れる。養護教諭を見る。

R児 「できなかった」濡れた部分を手で覆うようにしながら、寂しそうに小声で言う

養護教諭「最初はびしょびしょになってもいいんだよ。大丈夫」「お水お口に入れてちゃんと上向けたじゃない」

R児 「・・・」暗い表情で頷く。次の順番の幼児に変わる

1月18日（金）「・・・」頷く

登園するとすぐにほとんどの幼児がうがいをしようとする。「先生見て！見て！」とたくさん幼児が喜んでうがいをしている。

R児は登園してくると保育室の入り口で立ち止まり、うがいをしている幼児の姿をじっと見ている。

養護教諭「R児ちゃん、うがいをしょっか」

R児 「・・・」頷く。

身支度を整え、コップを持ち、他の幼児のうがいの指導をしている養護教諭のまわりをうろうろする。うがいを促すが躊躇する。ほとんどの幼児のうがいが終わりと、再びR児に声をかけてみると洗面所に向かい、コップに水を入れ準備をするがうがいをしようとはしない。

養護教諭「R児ちゃん、お口にお水入れてごらん。先生お手伝いしてあげるよ」

R児 「・・・」 頷き、口に水を含む

うがいの援助（口に水を含ませ、口を養護教諭が指で塞ぎ、顔を上に向かせしばらくして吐き出させる）をすると昨日のように口のまわりや襟元が濡れなかったため、それまでの暗い表情から少し、うれしそうな表情に変わる。つもりを大切にしていたため「できたじゃない」と言うとうれしそうな表情をする。これを数回繰り返し、服を濡らすことなくうがいを終えた。

R児以外の昨日できなかった幼児は「できないからしな〜い」などと言いつつしようとしなかったり、「もうした」「コップ忘れたからできない」と言いうがいを避ける幼児もいた。

#### 1月22日（火）「できないな〜」

R児は登園するといつものようにすぐにうがいを始める。そして、誰もいなくなるまでうがいを続ける。

R児 「できないな〜」（水を含み上を向くと口から水がこぼれてくる）

何度も何度も鏡を見ながら一人で練習を続ける。

R児 「おえ。おえ」「ごほん、ごほん、げ〜っ」 喉に水を詰まらせ、むせる。

「できないな〜」

「ぐい」

（上を向いた瞬間ごっくんと飲み込んでしまう）

「入っちゃった」

「やっぱりできないよ〜」

服を濡らしたりしながらもいつまでも練習を続ける。



H児 「先生見て。できるようになったよ」

A児 「わたしもできるようになったよ。見てて」

養護教諭「本当だ。できたね。よかったね」

H児とA児はクラスでの保健指導時にうがいのできなかった幼児。H児とA児のうがいをR児は手をとめてじっと見ている。その他の幼児も担任や養護教諭に「先生、いっぱいしたよ」「5回したよ」「上手でしょ」「もうばい菌いなくなった？」などと口々に言ったり、口の中を見せたりしている。その中R児はうがいを続ける。

養護教諭「今日はそれくらいでいいんじゃない。いっぱいしたからばい菌さんいなくなってると思うよ」

R児は寂しそうにうがいをやめる。

母親にはR児のうがいを頑張っている様子を伝え、早くできるようになって欲しいと思い、家で練習させることはしないで欲しいことを伝えた。

1月下旬にはほとんどの幼児がうがいができるようになる。R児は自分だけでできてないことを自覚しながら、毎朝自らうがいの練習をしている。登園してから洗面所に誰もいなくなるまでずっとうがいを続ける。余裕が出てくると、いろいろな表情を鏡に映しながら練習をする姿も見られるようになってきた。「ちょっとできたみたい」「今のはうまくいったみたい」（口から水が漏れなかったときなど）などと独り言をいいながら、うがいをしていることもある。時には他の幼児がしているのをじっと見ていることも増えていった。

早くうがいを終わらせ一緒に遊びたいと思っているT児が「まだできないの～」と言うこともあるが気にせず自分で納得するまで続ける日々が続いた。

2月1日（金）「お水の量を少しにして・・・」

R児はいつものように登園するとすぐにうがいをする。

S児 「先生見ていて。上手にできるよ」

「がらがらがらがら。ぺっ」（大きな声で）「上手にできたでしょ」

養護教諭「上手にできたね。どうしたら上手にできたの？」

S児 「大きな声でがらがらって言えばいいんだよ。見てて。がらがらがら、ぺっ。できたでしょ」

養護教諭「大きな声を出せば、上手にできるのか～」

M児 「お水の量を少しにすればいいんだよ」

「見てて」（口に少量水を含み）「がらがらがらがら、ぺっ」「でしょ」

養護教諭「そっか。お水の量を考えればいいんだ」

A児 「何も考えなくてもできるよ」

R児は他の幼児と養護教諭のやりとりをじっと見ている。自分のコップの水を捨て、少量に入れ直す

R児 「お水の量を少しにして・・・」(口に含む水をほんのわずかにする)  
「がらっ・・・」「これじゃあできないや」(水の量が少なすぎてうがいにならない)  
「少なすぎたのかな～」  
「これっくらいかな？」  
「がらっ・・・」「げっ、げっ」「ごほ、ごほ」

うがいにならなかったり、むせたり、いつものように服にこぼしたりしながらもうがいを繰り返す。時々、よく響くうがいの音が聞こえるとじっとうがいの様子を見ている水の量を何度も何度も調整しながら何度もチャレンジしている。

R児 「がらっ。ぺっ」「ごほごほ」「げーっ」(失敗を繰り返す)  
「がらがらがら。ぺっ」(小さな音)  
「できた??？」(小声で不思議そうに)

養護教諭 「できたじゃない」

R児 「・・・」(にこっとしながら頷く)

何度も何度も失敗を繰り返しているうちに何かの拍子にうがいができるしまった。この後も何度も試みるが、できたのはこの1回きりだった。

#### 2月4日(月)「できた!」

登園するといつものようにうがいをする。

R児 「がら。がら。がら。ぺっ」  
「がら・・・がら・・・がら・・・。ぺっ」  
「がら、がら、がら。ぺっ」  
「できた!」

にこっとしながら後ろでいつものように見守っている担任と養護教諭に目を向ける

担任 「R児ちゃん、できたじゃない!」

養護教諭 「できたね。ずっと、ずっと頑張ったもんね」

R児 「うん。できたね!」

T児 「R児ちゃん、できたね～。すご～い!」

H児 「R児ちゃん頑張ったからできたんだよね」

E児、K児 「一緒にしよう」

この後、R児はうがいができるようになったことを確認するかのようにながいを繰り返

し、満足げに、うがいを終了する。その間、何人もの幼児がR児のうがいの様子をにこにこしながら、見ている。うがいをしないで遊んでいる幼児の中には、遊びを中断させてうがいに参加する幼児もいた。

### 〈考 察〉

#### ○ルーティンの活動としてのうがいから健康行動としてのうがいへ

11月～12月にかけて、風邪気味の幼児が増加し、風邪が話題に上るようなころから風邪の予防のためのうがいを呼びかけてきた。それまでのうがいは「幼稚園に来たらまず手洗いとうがいをする」「外から帰ったら、牛乳タイムの前には手洗いとうがいをする」というように、生活の一部に組み込まれたルーティンの活動であった。ルーティンの活動として毎日継続されることは健康上意味のあることである。しかし、風邪が流行し始める前に、あえて健康のために必要な行為として自ら考え、自分にふさわしい方法で自ら取り入れようとする態度を養いたいと考えた。風邪の予防とうがいが結びつき、率先してうがいをしようとする幼児が徐々に増えていくことで、一斉の集団指導での効果を上げることもねらった。呼びかけや個別指導に対し反応し行動する幼児が増え、本格的に風邪特にインフルエンザが流行する1月に集団指導を試みることで、風邪の予防としてのうがい実践されるのではないかと考えた。

#### ○集団の中からの学び

集団指導の翌日の朝、登園すると多くの幼児が積極的にうがいをしている姿を目の当たりにし、R児は少しためらいもあったようだが養護教諭の誘導でなんとかうがいに取り組んだ。その後は自ら毎朝うがいに取り組んだ。多くの幼児の日頃の「〇回したよ」「風邪ばい菌いなくなった？」などの言動や積極的にうがいをしている姿から風邪を予防したいという姿勢を見て取ることができ、この集団の影響があったからこそ、毎日R児がうがいに向かえたのではないだろうか。また、うがいの練習を重ねるうちに他の幼児のうがいの様子をじっと見つめることも多くなってきた。練習を重ねたばかりではなく、そこからの学びがうがいができるようになる結果に結びついたのではないだろうか。R児自身が学び取った力である。少子化、核家族化の時代いろいろな方法や価値観に触れる機会が少なくなっている。一対一で丁寧に教えるばかりでなく、幼児自身が幼児自身の力で学び取る機会を気長に保障していくことも大切ではないかと思った。

#### ○家庭との連携

親にとり、できないことができるようになって欲しいと思ったり、集団の中でできない少数派に我が子が入っていれば不安になり、焦るものである。しかし、R児の母親にはうがいを頑張っている様子や教師自身がその姿を認めていることを伝えていくことで、R児のうがいを焦らず見守ることができたのだと思う。そういった母親の姿勢があったからこそ、ほとんどの幼児ができるようになっていっても、R児はマイペースでうがいを続けることができたのではないかと思う。

・「キズバン」を視点にして

事例1 「やめて！やめて！キズバンはやめて！」

I 児は3歳児の時、保健室でけがの処置を受けた経験は一度しかなく、ほとんど保健室に来ることのない幼児だった。しかし、時々自宅から貼ってきたと思われるかわいいキャラクター柄のキズバンを体につけているところを目にすることがあった。

4歳児になりI児の保育室は保健室の真向かいにあるためかI児にとっては保健室は気になる存在の一つとなったようで、用がなくても「何してるの?」「この子どうしたの?」などと顔を出していた。養護教諭のしている処置を黙ってみていることも珍しくなかった。4歳児になり、I児にとって保健室の存在が身近になったせいも、3歳児の時には年間を通して2回の保健室の利用が4歳児の時には16回となった。4歳児の5回目（6月25日）までの来室では出血している傷にはキズバンを使い、出血が止まった傷には消毒だけという普通の処置を施していた。

6回目の来室である7月4日、切り傷を負い出血したまま保健室にやってきた。いつものように消毒をし、キズバンをするつもりでいた。

I 児 「やめて！やめて！キズバンはやめて！」

養護教諭「・・・」

I 児 「ばい菌の巣になっちゃう！キズバンするとばい菌の巣になる～。ばい菌の巣になったら大変。やだよ～。怖いよ～」(いいながら泣き出す)

養護教諭「そっか。ばい菌の巣になるからキズバンを貼って欲しくないんだ。でも、まだ血が出てるよ。この血どうしようか？」

I 児 「いいの、いいの。頑張って止めるから。好き嫌いしないで何でも食べてからだ鍛えるから」

養護教諭「好き嫌いしないでからだ鍛えると血が止まりやすくなるんだ」

I 児 「そうだよ。野菜も食べるよ～」

養護教諭「でも、今出ているこの血はどうする？」

I 児 「・・・」

養護教諭「このままじゃあ、お友達に血がついちゃうかもよ。それにここにゴミがくっついたりしないかな～。それにどこかにぶつけてここ（傷口）がもっと開いてもっと血が出てくることにならないかな～」

I 児 「大丈夫！気をつけるから。だからキズバンだけは絶対にやめて！」

養護教諭「わかったよ。じゃあこのままにしておくから。しばらくしても血が止まらなかったらすぐにいらっしやい」

I 児 「うん。わかった」

「止まれ！止まれ！」と言い傷を眺めている

これまでの態度と一変して、この日のI児は異常にキズバンに抵抗を示した。そしてこの後のけがでもこのようなやりとりが数回続いた。

この状況を保護者に伝え、家庭での状況を聞く。母親は「家でも一緒です。自分もそうだけど、自分だけでなく、弟までにキズバンを貼らせようとしなくて困っているんです。家では怖がるような体験してないと思うんですが、いつころからか急にキズバンに対して極端な反応をするようになったんです」と話す。

I児が「好き嫌いしないで何でも食べて体を鍛えるから・・・」の言葉は養護教諭がへいぜい年長児にキズを早く治すための方法として話していることであった。また、「ばい菌の巣になっちゃたら大変!」という言葉も年長児にキズバンの害を説明するときに使っている言葉である。つまり、I児は時々保健室に顔を出しながら、養護教諭や他の幼児の話している内容を聞きかじり、自分なりに解釈していったようだ。

#### 事例2 「そうなんだ～。じゃあいつはずせばいいの?」

I児は、手にすり傷を負って来室した。(13回目)

I児 「キズバンはやめて!絶対しないで!」

養護教諭 「わかったよ。でもねキズバンって使ったほうがいいときもあるんだよ」

I児 「でも、いやなの。嫌いなの」(泣く)

養護教諭 「今まだ血が出ているけどキズバンで覆っちゃえばお友達にもくっつかないし、このまま血が止まることもあるんだよ。それにこのまま遊んでいて砂やゴミがくっついたらどうしよう。ここ(傷口)からばい菌が入ったらどうする?」

I児 「ふん・・・」

養護教諭 「キズバンはずっと貼っておくとばい菌の巣になることもあるけど、血が止まったらすぐにはずせば大丈夫なんだよ」

I児 「そうなんだ～。じゃあいつはずせばいいの?」

養護教諭 「手を洗ってキズバン濡れたらはずしたほうがいいね」

I児 「じゃあ牛乳の時、手を洗うからその時濡れたらはずす」

養護教諭 「そうだね」

I児 「でもまだ痛いからこっちの手だけ洗わないでおこうと思うんだけど・・・。濡れなかったらいつはずすの?」

養護教諭 「血が止まったかなって思ったらはずしてみたら」

I児 「血が止まったかどうか見てみればいいんだね。また、見せに来る」

養護教諭 「そうだね。いつはずしていいかわからなかったら見せにおいで。忘れていたら帰る前でも大丈夫だよ」

I児 「わかった。後で見せに来る」

この日はいつもより抵抗が少なく、養護教諭の話にも耳を傾け、結局キズバンを貼ったまま保育室に戻り、帰りに見せに来る。止血している状態を目で確認させ、キズバンが必要でなくなった状態を知らせ、はずす。本人も納得し、安心して帰宅する。

キズバンを貼る機会を意図的に体験させたり、見る機会をつくったりすることで、キズバンに対する極端な反応はなくなり、貼ったり貼らなかったり状況に応じて対応できるようになっていった。

けがの経験はそれほど頻繁にあるものではない。したがって、本人が体験して学ぶというより、他人のけがの処置に立ち会い、友達の考えや反応、養護教諭の話などを見聞きする経験から学ぶことのほうが多い。I児も見聞きする経験からキズバン＝ばい菌の巣、怖いものという考え方を身につけた。そして、キズバンの使用についても適切に対応できるようにもなっていた。

### 事例3 「(キズバン) する！」

前日けがの処置の保健指導を4歳児のクラスでした。キズバンの害と効果、水洗いの必要性、けがを恐れないで元気に遊ぶことの大切さについて話した。翌日、K児は肘にすり傷を負って保健室を訪れた。

K児 「先生けがした。サッカーしていてけがした」

養護教諭 「外でけがしたのにきれいだね～」

K児 「だってあらってきたもん。先生昨日話したやろ。覚えとらんの？」

養護教諭 「K児くん、ちゃんとお話聞いていてできたんだ」

K児 「そうや。痛かったけど我慢した。すごいやろ」

養護教諭 「消毒するね」

K児 「痛い？」

養護教諭 「痛いかも。でも我慢できるくらいだと思うよ」

消毒をする

養護教諭 「どお？」

K児 「痛くなかった。我慢できた」

養護教諭 「キズバンどうする？」

K児 「する！」

養護教諭 「あれ、昨日のお話どうだったっけ？」

「キズバンはばい菌の巣になるよ」

K児 「すぐとるから大丈夫や！」

養護教諭 「だけどここ血が出てる？」

K児 「・・・。出てないね」



「そうや。血が出てなかったらキズバン貼らんでいいんやよ」

養護教諭「K児くんはこのけがどう思う？」

K児 「そっか。血が出てないからいらんのや！」

A児 「先生よかったね」

養護教諭「何が？」

A児 「キズバン貼らんくて。貼ったらばい菌の巣になったでしょ」

K児は保健室に来る前に担任とかかわっていたことが、後の担任との情報交換の中でわかった。担任は前日の保健指導を振り返り、K児にけがの処置について考えさせた。傷を水洗いすることはK児が自ら考え実践したことではなく、担任とのやりとりの中でたどり着いた行為であった。担任とのやりとりの前は、本人はけがをしたらすぐに保健室へ思っていたようだ。

K児は3歳児の時10回、4歳児の時11回保健室を利用している。今回は11回目の来室である。また、自分のけがの処置以外で保健室に顔を出すことはめったにない幼児である。したがって、自分のけが以外の他者のけがの処置の見聞きの経験はそれほどない。

保健指導の翌日のけがの事例である。どんな指導であっても、全ての幼児が全ての内容を実践に結びつけられるわけではない。具体的に場面を捉えての指導がいかに大切かということがわかる。しかし、集団指導がすぐに実践には結びつかなかったかもしれないが、幼児にとって十分考える材料にはなっていたと思う。集団指導と個別指導がリンクすることが必要であることがわかる事例であった。また、保育を通して養護教諭だけでない担任、全ての教師が情報交換を密にしながら、連携していく必要性も感じた。

4歳児は年間の保健室利用状況からもわかるように、他の学年に比べけがをする経験が多い。したがって、この時期にけがの手当の指導をすることは効果的ではないかと考える。しかし、個によって経験も受け止め方も違う。したがって、それぞれ個々の体験を通して考え、実践する機会を大切にしなければならないと思った。

#### 事例4 「キズバンダメだよ」

3歳児R児が手指にすり傷を負って来室した。R児はしょっちゅう保健室に顔を見せる幼児である。今回は34回目の来室である。来室回数が多いため、しっかりいつ・どこでどこをどのようにどうしたということを自ら話せるようになっている。

R児 「先生、どこでかわからないけどこの指けがしてます。お部屋で気がついたらなりました。治してください」

養護教諭「どうやって治そうか？」

R児 「これ（消毒）をつけて・・・」

養護教諭「わかったよ」と言い消毒を済ませる

養護教諭「キズバンはどうする？」

R児 「つける！」

N児 「え～」と言いじつとにらむ。(その声にR児もN児を見つめ返す)

N児 「キズバンダメなんだよ」

R児 「・・・」(養護教諭の顔を見つめる)

養護教諭「N児ちゃん、R児ちゃん何でダメなのかわからないみたいよ」

N児 「だって先生と勉強したじゃない。血が出てないのにキズバン貼ったらダメだって」

養護教諭「何で血が出てないとキズバン貼っていけないの？」

N児 「キズバンは血を止めるために貼るんだよ」

R児 「血が出てるもん」

N児 「それは出てたんだよ。今は止まってるんだよ。だからキズバン貼らないんだよ」

養護教諭「じゃあキズバン貼っておいたらどうなるの？」

N児 「ずっと貼っておくとばい菌の巣になるんだよ」

養護教諭「そうだね」

「R児ちゃん、このお兄ちゃんちょっと前に先生とキズバンのお勉強したからよく知ってるでしょ。R児ちゃんはキズバンどうすればいいと思う？」

R児 「は・ら・な・い・・・・？」

しばらくして、K児が来室する

N児 「どうしたんだ」

K児 「どうしてかわからないけど血が出てるんだ」

養護教諭「見せて」

N児 「そんな血が出てるって言わないんだよ。もう血は止まってる！」

K児 「?・?・?」(首を傾げながらにやりとする)

N児 「キズバンはいらないよ」

養護教諭「そうなんだって。K児ちゃんどう思う？」

K児 「わからない」

N児 「だから、血が出てないから消毒だけでいいんだよ。血が出てないのにキズバンつけたらばい菌の巣になるんだよって言ってるだろ！」

養護教諭「すみれ組さんは先生とキズバンのお勉強したから、どんなときにキズバンを貼ったらいいか知ってるんだ。キズバン貼っていいかどうか自分で考えられるようになっているんだ」

養護教諭「そうだね」

「今度さくら組さんでもちゃんとお話したほうがいいのかな～」

K児 「そうじゃないと僕たちわからんもん」

養護教諭「でも、今日N児ちゃんに教えてもらえてよかったじゃない」

K児はN児を見つめ照れくさそうににっこりする。

その後、またR児が来室する。

N児 「またおまえかよ～。見せてみろ」

R児 「はい」

N児 「なんにもなってないじゃないか」

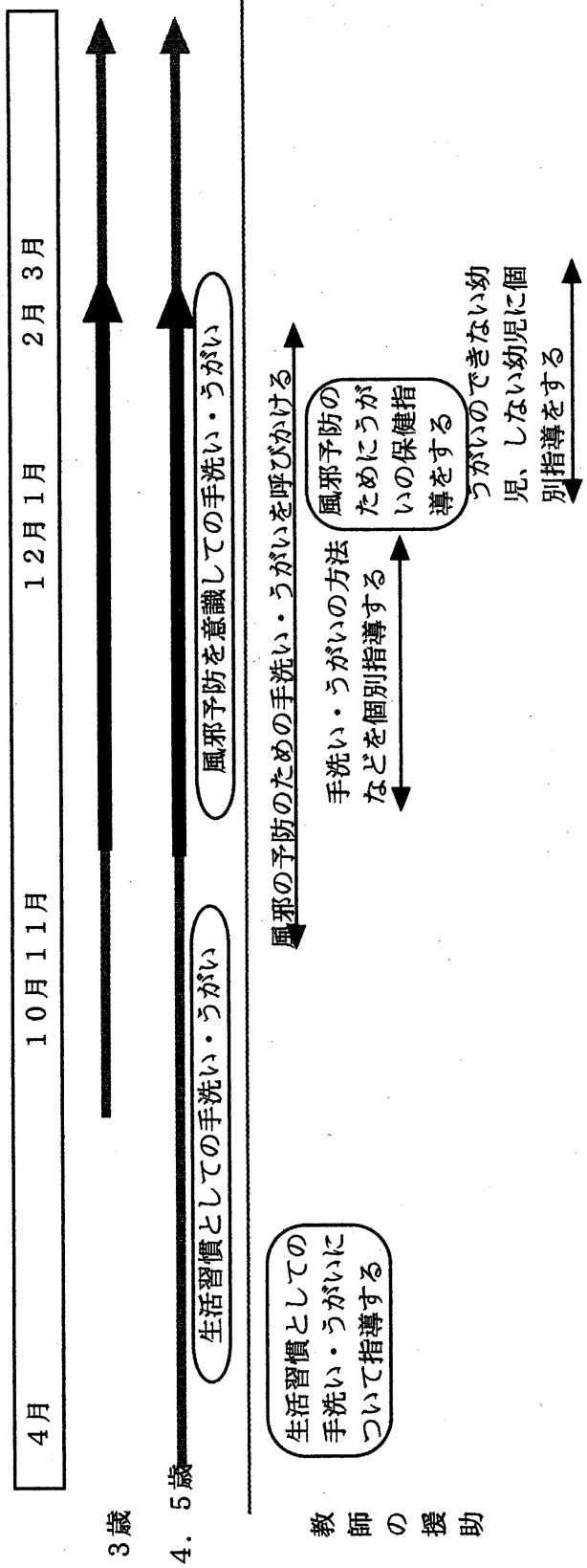
R児 「キズバンいらないね」

N児 「うさぎ組にはちゃんと教えてやらんなんな」

N児は自分がけがをしたわけではない。保健室でけがをしている幼児に対応する中で、けがの処置の保健指導の内容を追体験しているようだ。はじめのR児への対応よりK児への対応のほうが自信ありげである。説明しながら自分の理解を深め自信につなげていっているように思われる。

また、保健指導の内容が幼児から幼児に広がっていく様子が見えてくる。保健室は異年齢がかかわり合える場所でもある。保健指導の内容が異年齢へ広がることも期待できる。また、そこには養護教諭が立ち会えるため、情報が一人歩きする危険性も防ぐことができる。広まりを意識した保健指導を考えていきたい。

手洗い・うがいについて



教師の援助

登園時、かたづけ後  
弁当前にうがいをする

- ・呼びかけに気づき、風邪の予防のために手洗い・うがいをしようとする
- ・「ぶくぶくうがい」と「がらがらうがい」を知る (3. 4歳)
- ・うがいを自分たちで啓発しあう (5歳)

幼児の姿

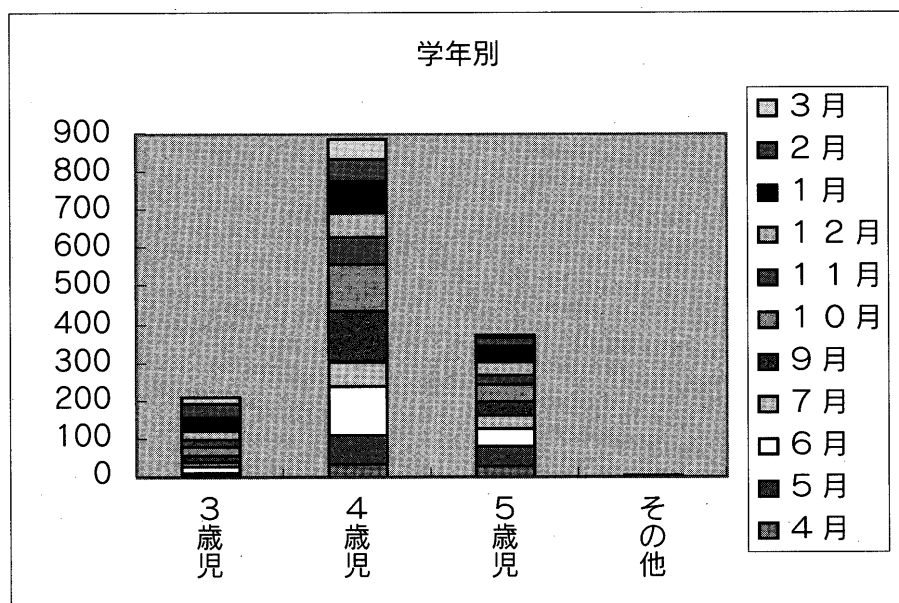
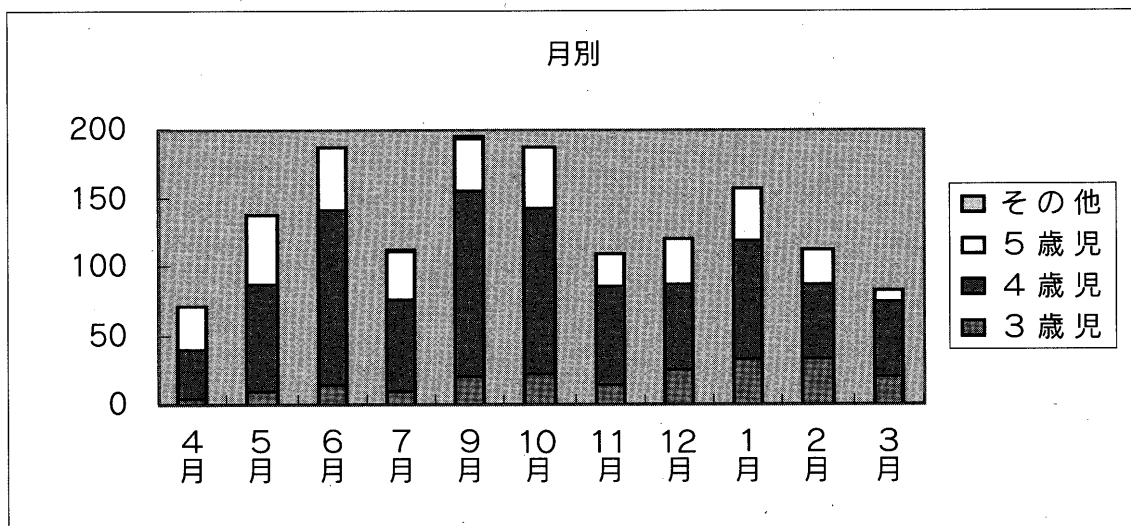
- ・歯磨き時も「がらがらうがい」になる (3. 4歳)
- ・風邪を予防しようとうがいを実施する
- ・がらがらうがいをしていることを認めて欲しくて実施する (3. 4歳)
- ・欠席状況などからうがいを考える (5歳)

- ・うがいが習慣化される



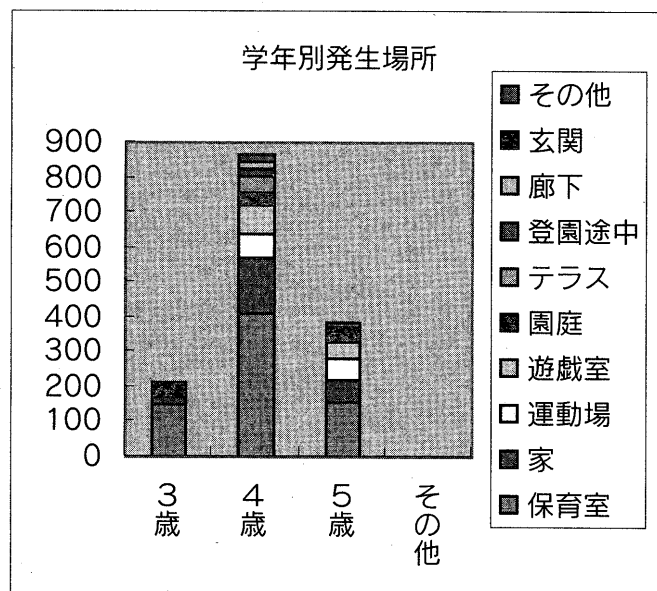
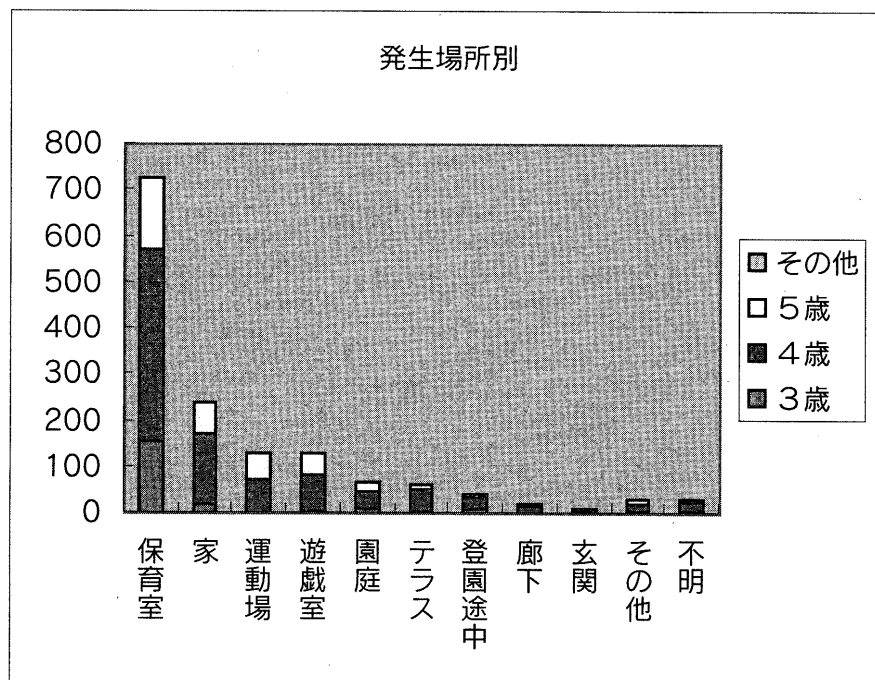
## 参考資料2 2002年度 保健室利用状況

ここで計上している件数は何らかの処置をした件数のみである。他に居場所やスキンシップを求めてなどの理由で保健室を訪れている幼児はたくさんいるが件数としてはあげてない。



月別の利用状況では、4月から6月にかけて利用件数が増えている。新しい園生活に徐々に慣れ、活動自体も広がり、活動事態が活発になっているあらわれではないか。また、11月から冬の間利用件数が少なくなっているのは、気候により戸外で活発に遊ぶ機会が減るためと考えられる。1月に若干増えているのは、インフルエンザなど風邪が流行することが一因であろう。

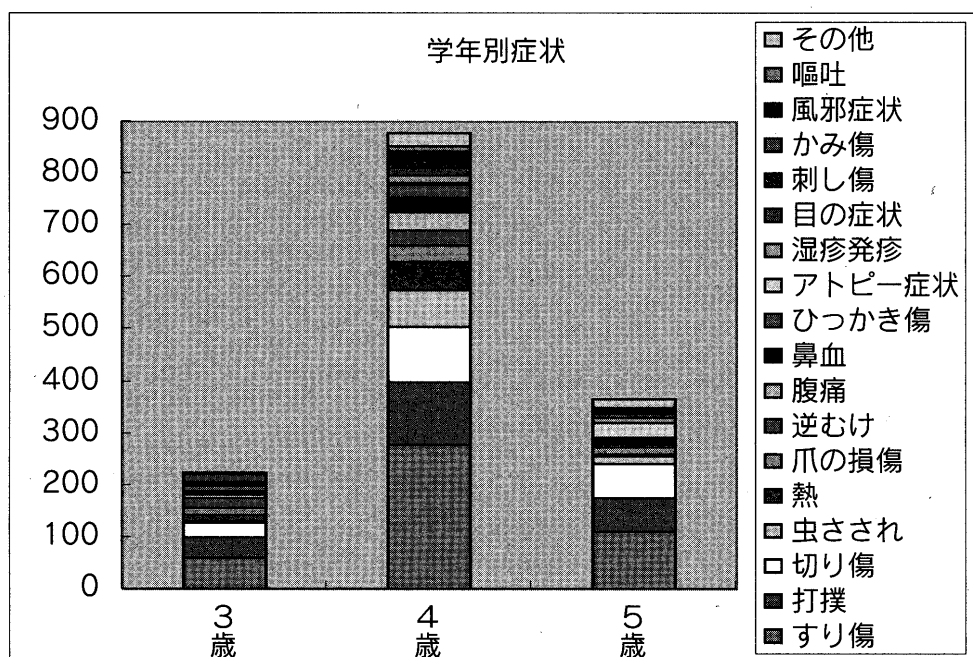
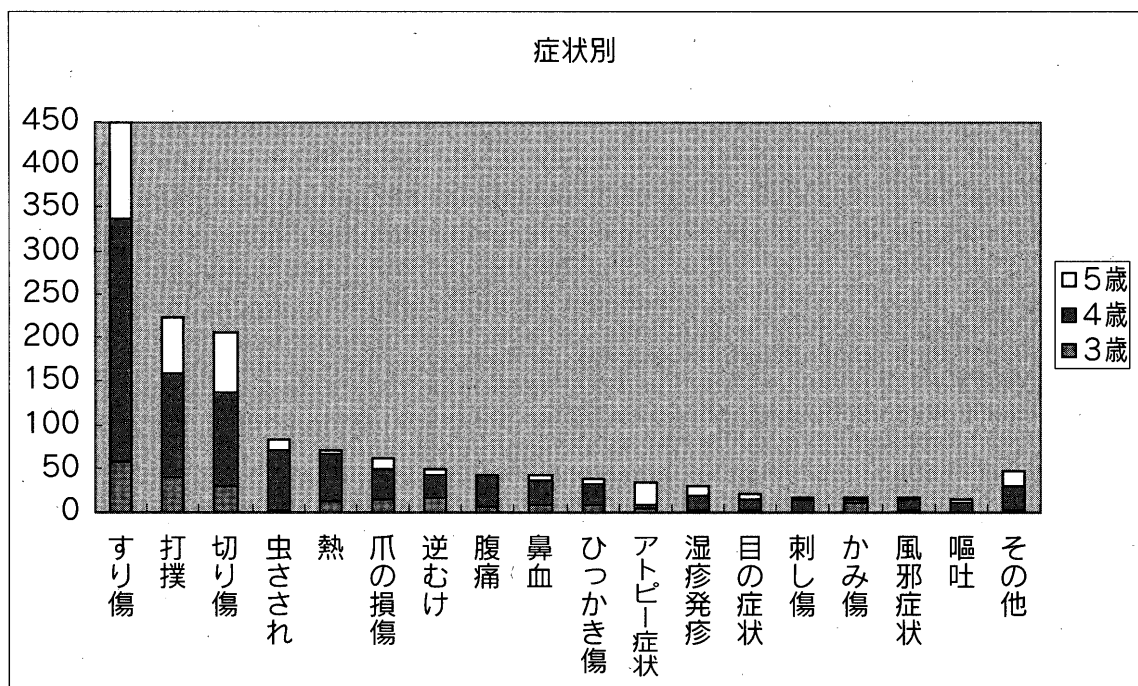
学年別では4歳児が一番多い。これは4歳児になるとからだが発達にもかかわらず活動が活発になり、いろいろなことに挑戦しようとする経験が増え、活動範囲が広がることが要因として考えられる。また、保健室の存在を知り、利用方法や利用価値がわかってくるためと考えられる。逆に5歳になると利用件数が減るのは、4歳に比べからだが発達すると同時に、危険を回避する能力や注意力が備わってくるからではないだろうか。



けがの発生場所別では保育室が圧倒的に多い。保育時間の多くを保育室で過ごしていることと戸外で活発に活動しているときよりも、保育室内でのちょっとした不注意による些細なけがのほうが多いことのあらわれではないか。特に3歳児は7～8割が保育室でのけがである。ここからは逆に、3歳児の活動範囲が想像できる。

ついで、家でのけがが多い。家での手当が適切になされていない場合もあるが、手当は適切になされていても幼児自身が満足していなかったり、不安を残したままだったりと精神面でのフォローが充分でないことなども要因の一つであろう。保護者との協力の必要性を感じる。

症状別ではすり傷、打撲、切り傷が大半を占める。すり傷、打撲が多いのは幼児は運動機能が未発達な上、からだの割に頭の比重が多く、アンバランスであり転倒しやすいためと考えられる。切り傷が多いのも指の巧緻性が充分でないにもかかわらず、カッターやはさみなどを使



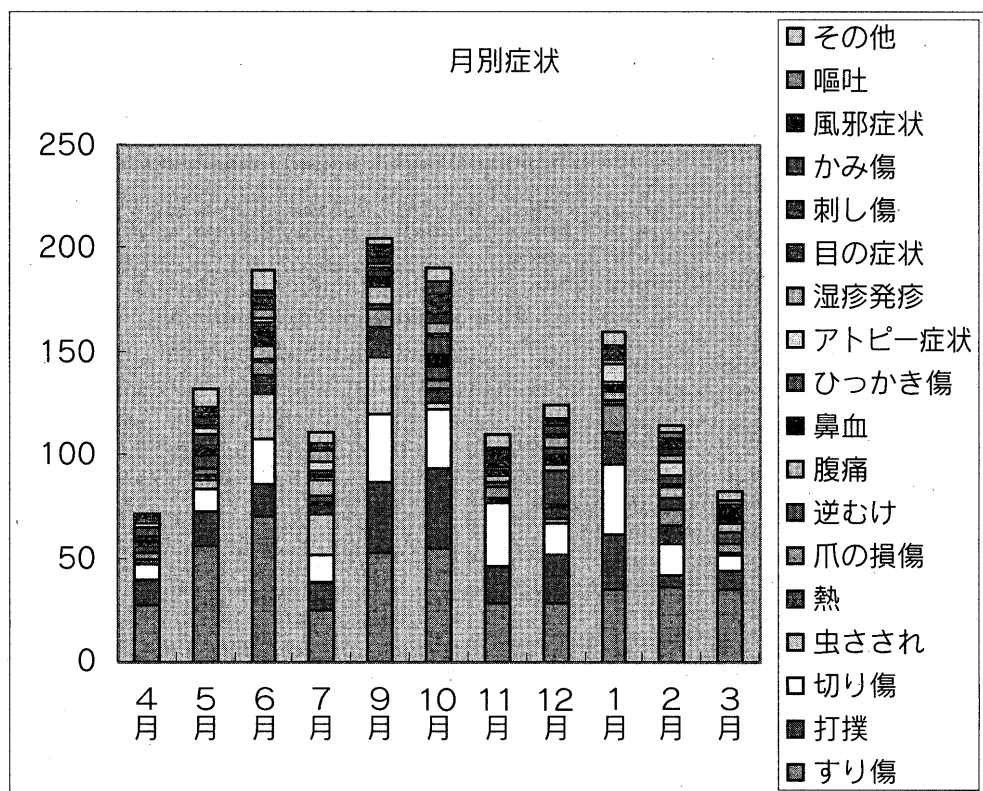
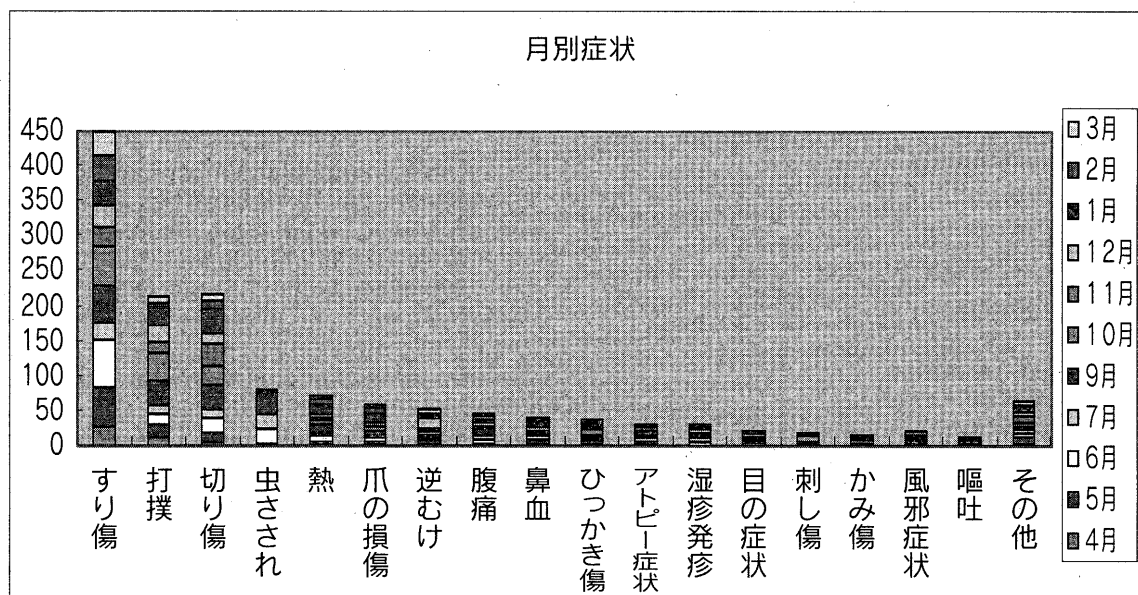
おうとするためと考えられる。

3、4歳児に比べ、5歳児にアトピー症状により来室する幼児が多い。3、4歳児にもアトピー症状の幼児はたくさんいるがこの時期徐々によくなり、保健室に処置を求めるほどではない。しかし、5歳児になって来室している幼児は症状が重くなっている幼児が多い。アトピー性皮膚炎や乾燥肌などにより処置が必要と認められる幼児の保護者には、早期に適切な対応の必要性を伝えていくことが大切ではないかと思われる。

月別の症状ではいくつか特徴的な状況がみられる。

虫さされでの来室は6～9月に集中している。幼児は皮膚も弱く、抵抗力も低いいため、ちょっとした虫さされが重症化することがある。熱をもち広範囲に腫れてしまうことも珍しくない。





状況に応じて適切な処置をしないと伝染性膿化疹（とびひ）につながることもある。たかが虫さされと、たかをくくらずに、適切な処置が求められる。

アトピー症状が1～2月に増えている。この時期、床暖房やファンヒーターなど空気を乾燥させるような暖房器具がふんだんに利用されている。また、この時期は表現会の時期と一致する。練習に楽しんで参加していても練習や保護者の期待などがストレスになってくることがある。空気の乾燥やストレスなどアトピー症状の悪化要因が重なるためアトピー症状を訴え来室する幼児が増えると考えられる。

かみ傷はほとんどが3歳児と一部の4歳児に限られる。10月～12月に増えているのは、3歳

児の場合、密接なかかわり合いが増えてきていることのあらわれではないか。1学期は一人遊びあるいは場を共有するにとどまっていた幼児らが、2学期に入り、少しずつ視野が広まると同時に、かかわり合いが密になる。それにより、思いがぶつかり合う機会も増え、かむという行為が増えてくるのであろう。また、1学期にもかむという行為は見られるが、処置を必要とする程のけがにはつながらない。幼児のからだの成長の早さを感じる。

熱に関しては年間通してみられる。若干9月と1月に多くなっているが、9月は昼夜の気温の差が大きいことと夏の疲れが出て抵抗力が落ちていることが関係しているのであろう。また、1月はインフルエンザや風邪が流行るためと考えられる。しかし、年間通して熱による来室が多いのは、幼児の特徴として、すぐに熱が出るということが要因となっているのではないか。ところで、熱があることを自覚し来室する幼児はほとんどいない。すなわち、日常の教師の視診や触診による観察や、幼児の訴えをよく聞くことが大切なことがわかる。